広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	デァ・フォン・キューレンベルクのリートに見られる身体美と内面的美徳
Author(s)	伊藤，亮平
Citation	広島ドイツ文学 , 34 : 31 - 46
Issue Date	2022-02-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051977
Right	Copyright (c) by Author
Relation	

デァ・フォン・キューレンベルクのリートに見られる身体美と内面的美徳

伊藤 亮平

0. はじめに

ミンネザングのレトリックの特徴として，具象性の乏しさがしばしば指摘される。そしてミンネザングにおいては，ミンネを巡る抽象的な内省がリートの中心的テーマとして取り上げられることが主である。その際，女性は女性らしい徳を備えた理想像として抽象的な存在として描かれる。彼女らは肉感的要素を感じさせない，すなわち身体性の希薄な存在として作中に登場する。とはいえ，ここに身体=魂の牢獄とみなす身体観が反映されているとみなすのは早計であろう。ミンネザングにおける身体描写の乏しさは，身体を軽視し，魂(精神，内面性)の重視を説いているためではない。むしろ女性の身体の美しさは完璧であり，完璧であるが故に言葉に表すことができないのである。いわば女性の身体に関する具体的描写の乏しさが，逆説的に女性の身体美の完璧さを表現しているのである。

中世においては，外面の美しさ，すなわち身体美は内面の徳を表していると考えられたことはしばしば指摘されている[1]。ところが，尾野(1996)が指摘しているように，当時の女性の徳とはどのようなものなのか具体的に考察した研究は意外と多くない[2]。

では，ミンネザングにおいて女性の身体美によって女性の徳目はどのように表されているのか，実際に女性の身体美によって徳は実際に表現されているのか，また男性の身体美と内面的な美徳はどのような関係なのか，この論文では「高きミンネ」が発生する以前の 1150-1160 年代の代表的な歌人であるデァ・フォン・キューレンベルク Der von Kürenberg のリートを例に考察したい。

1. ミンネザングにおける身体

H. テルフォーレン Tervooren が述べているように，中世の身体美についての見解は両義的である[3]。一つは身体の美しさは神によって創造されたものであるが故に善いとする見方

---

[1] ヨアヒム・ブムケ (平尾浩三他訳): 中世の騎士文化 (白水社) 1995 年，422 頁参照。

[2] 尾野照治: ドイツ中世の女性教育と理想的女性像［京都大学『ドイツ文學研究』第 41 号，1996 年，1-39 頁］，1 頁参照。

[3] Tervooren, Helmut: Schönheitsbeschreibung und Gattungsethik in der mittelhochdeutschen Lyrik. In: Schöne Frauen - Schöne Männer. Literarische Schönheitsbeschreibungen. 2. Kolloquium der

である。もう一方は，身体美，特に女性の身体の美しさは男を誘惑し，理性を失わせるというものである。つまり，女性の身体美には善であると同時に悪でもある。ミンネザングにおいても，女性の身体美はこの二つの側面を持ち合わせている[4]。しかしながら，ミンネザングは恋愛を主なテーマとしていることから[5]，ミンネザングでは基本的に女性の身体の美しさが賞賛の対象として描かれるのは当然のことであろう。しかし女性の身体の美しさを具体的に表現する例はそれほど多くない。なおテルフォーレンは，ミンネザングでは形容詞を用いて女性の美を表現することが多いことを指摘し，女性の身体美を表す語彙として，„guot“, „schoene“, „süeze“, „wert“, „reine“, „wolgetân“を挙げている[6]。無論，女性美を称賛する語句はこれだけに留まらず，時代を経るにつれ，使用語彙やレトリックのレパートリーも増大する。キューレンベルクのリートではレトリックの複雑さは見られず，己の感情が率直に表現されており素朴な印象を与える。次節から具体的に彼のリートを検証したい。

2. キューレンベルクにおける女性の身体

デァ・フォン・キューレンベルクは，1150-60 年頃にドナウ河流域で活動し，ミンネゼンガーの中で，最も初期の段階に詩作した歌人である。彼は，後にミンネザングにおいて一般的に使用されるカンツォーネ詩節ではなく，キューレンベルク詩節と呼ばれる，長詩行の詩型を使用している。また彼のリートには「高きミンネ」概念が芽生えておらず，男女の相互愛，時には男性優位の直情的な愛が語られている。

キューレンベルクのリートにおいて，女性の身体が比喩を交え具体的に描かれるのは次の箇所である。

Swenne ich stân aleine　　in mînem hemede,
unde ich gedenke an dich,　　ritter edele,
<u>sô erblüet sich mîn varwe,　　als der rôse an dem dorne tuot,</u>

Forschungsstelle für europäische Literatur des Mittelalters. Hrsg. von Theo Stemmler. Tübingen (Gunter Narr Verlag) 1988, S. 171.

[4] 例えば，ハインリヒ・フォン・モールンゲンのリート MF 126, 8 では，女性の眼差しを「妖精」に喩えている。この妖精は美しいが，その美しさ故に男を惑わせる存在として描かれる。

[5] ミンネザングは，狭義的には恋愛，特に「高きミンネ」を主題とする抒情詩群を指す。しかし，十字軍遠征や老いをテーマにしたリートも存在し，必ずしも恋愛のみを扱っている訳ではない。ミンネザングは当時の宮廷抒情詩の総称と捉えるのが妥当であると思われる。ヴェルナー・ホフマン他訳著：ミンネザング　ドイツ中世恋愛抒情詩選集 (大学書林) 2001 年，276-279 頁参照。

[6] Vgl. Tervooren, a. a. O., S. 172.

und gewinnet daz herze　　viel manigen trûrigen muot.[7]
ひとり肌着を着て
気高い騎士のあなたを想うと，
私の顔は刺の中にある薔薇のように赤くなり，
心は多くの悲しみに溢れます。
(デァ・フォン・キューレンベルク MF 8, 17。下線部は筆者による。)

上記の詩節は女性の台詞である。女性は意中の男性のことを想い，顔を赤らめる。原文では「私の肌の色」(mîn varwe)とあり，「顔」という記載はない[8]。しかしながらリートの内容から，「顔色」と解釈するのが自然であろう。ここでは女性の顔色が「薔薇」に喩えられている。そして，薔薇は女性の赤らめた顔を表現するために用いられているが，同時に女性の美しさも表している。

女性は恋の喜びを示す一方で不安も吐露する。具体的な背景は明かされていないが，二人は何らかの事情で離れ離れになってしまっているのかもしれない。あるいは意中の男性と相思相愛ではなく，女性の一方的な片想いなのかもしれない。恋の喜びと不安というアンビバレントな感情は「薔薇」と「棘」によって表されている。

このリートでは女性の身体や心情が薔薇や棘によって比喩的に表現されている。さらに「一人で」(aleine)，「肌着」(hemede)を着ているという描写に，エロティシズムを見出すことも可能であろう。

上記以外のキューレンベルクのリートでは，女性の美は「美しい」(schoene)という形容詞で表され，用例は２例である。まずは MF 9, 21 から検討したい。

Wîp vil schoene,　　nû var dû sam mir.
lieb unde leide　　daz teile ich sant dir.

---

[7] キューレンベルクのリートは全て以下の版より引用した。Des Minnesangs Frühling. Unter Benutzung der Ausgaben von Karl Lachmann und Moriz Haupt, Friedrich Vogt und Carl von Kraus. Bearbeitet von Hugo Moser und Helmut Tervooren. I. Texte. 38., erneut revidierte Aufl. mit einem Anhang: Das Budapester und Kremsmünsterer Fragment. Stuttgart (Hirzel) 1988. 以下 MF と略する。

[8] Benecke / Müller / Zarnke が編纂した『中高ドイツ語辞典』では，„varwe“の意味としてまず「色」を挙げ，次に「a. 化粧，b. 人間の肌の色，一般的に外見」(a. schminke. b. farbe der menschlichen haut, aussehen überhaupt.)と細分化している。Vgl. Benecke / Müller / Zarnke: Mittelhochdeutsches Wörterbuch. Bd. III. Leipzig (Hirzel) 1860, Sp. 241[b]. 以下この辞書を BMZ と略する。また，同学社から出版されている『新訂・中高ドイツ語辞典』では，日本語訳として 3 番目の項目に「顔色，外見」を挙げている。伊東泰治他編: 『新訂・中高ドイツ語小辞典』 (同学社) 2001 年，602 頁参照。

die wîle unz ich daz leben hân,　sô bist du mir vil liep.
wan minnestu einen boesen,　des engan ich dir niet.
実に美しい女性よ，さあ私と一緒に行きましょう。
喜びも悲しみも，私はあなたと分かち合いたい。
この命が続く限り，あなたは私にとって本当に愛おしい人だ。
ただ，あなたが悪い人を愛することだけはして欲しくない。
(デア・フォン・キューレンベルク MF 9, 21。下線部は筆者による。)

このリートの語り手は男性である。4行目の„einen boesen“については，これまで様々な解釈が挙げられてきた。その解釈として，「身分の低い男」，「恋敵」，「騎士に相応しくない，品位のない男」，「自分よりも劣った男」，「語り手の男性自身」などがある[9]。C.・フォン・クラウス C. von Kraus はキューレンベルク MF 8, 1 第２行目の「礼節をわきまえた騎士」(hübsch ritter)と対比させ，„einen boesen“を「価値の低い，より劣った男」(einen Geringwertigen, Minderen)と訳している[10]。G.シュヴァイクレ Schweikle は，この箇所を„einen Geringen“[11], D. クーン Kuhn は„einen Unwürdigen“と訳しており[12], 概ね C. フォン クラウスの説に従っているようである。

また，キューレベンクの別のリートである MF 7, 19 がこのリートの「対唱」(Wechsel)という説もあるが，その点については否定的な見解が多い。このリートに関して先行研究では，MF 7,19 との関連と上述の„einen boesen“の解釈が主に取り上げられるが，それ以外の箇所については特に説明を必要としないほどの素朴な内容のリートである。このリートは男性による求愛の歌であり，率直に女性に対する想いが述べられている。その際，男性は「実に美しい女性よ」と呼びかけ，「美しい」(schoene)という形容詞をステレオタイプ的に用いている。

„schoene“を用いたもう一つの用例は下記の通りである。

Der tunkele sterne　der birget sich,
als tuo dû, vrouwe schoene,　sô du sehest mich,

---

[9] Vgl. Schweikle, Günther: Mittelhochdeutsche Minnelyrik. I. Frühe Minnelyrik. Stuttgart (Metzler) 1993, S. 372.

[10] Kraus, von C. : Des Minnesangs Frühling. Kommentare. III /1. Untersuchungen von C. von Kraus. Durch Register erschlossen und um einen Literaturschlüssel ergänzt. Hrsg. von H. Tervooren und H. Moser. Stuttgart (Hirzel) 1981, S. 31.

[11] Schweikle, a. a. O, S. 121.

[12] Vgl. Kasten, Ingrid (Edition der Texte und Komm.) / Kuhn, Margherita (Übers.): Deutsche Lyrik des frühen und hohen Mittelalters. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker) 1995, S. 51.

sô lâ du dîniu ougen gên　　an einen andern man.
sôn weiz doch lützel ieman,　　wiez under uns zwein ist getân.
仄暗い星がその姿を隠すように，
私を見つめるときは，美しい貴婦人よ，そのようにしてください。
そして，あなたの目を他の男に向けてください。
そうすれば，私たち二人の間に何があったのか，決して誰にも分かりはしないでしょう。
(キューレンベルク MF 10, 1。下線部は筆者による。)

前半 1-2 行の意味が少々分かりにくいリートである。1 行目の„der tunkele sterne“は直訳すれば「暗い星」であるが，解釈が分かれる箇所である。その解釈について，黒崎(1965)はプファフ Pfaff や G.エーリスマン Ehrismann の説を踏まえ簡潔にまとめている。それによるとこの箇所は，1. 実際に星が暗い，2. 星自体は明るいが，霞がかかるなど何らかの理由で暗く見える，という二つの見解に別れ，黒崎自身はこの箇所を「暗の中で光輝く星」と解釈している[13]。なお，ミンネザングの校訂本である『ミンネザングの春』(Des Minnesangs Frühling)では，この箇所に「夜明けの星(？)」(Stern der Morgendämmerung(?))という注がつけられている[14]。いずれの解釈も決め手に欠けるが，星が霞，雲，あるいは夜明けによりその輝きが弱まる様子を表現しているとみなすのが妥当だろう。

なおこのリートでは，女性の身体に関して，「目」が語られている。ミンネザングでは女性の身体の部位として「目」が称賛されることが多く，また当時は「目」は恋愛感情の生じる入り口と考えられていた[15]。ところが語り手の男は，自分を見つめないで欲しいと女性に頼む。そして，その眼差しを他の男に向けるようにと女性に忠告する。そうすることによって，二人の仲が周囲にばれないようにする，いわばカモフラージュである。この点から「高きミンネ」の恋愛観とは異なり，二人が相思相愛であることが窺える。

そして女性がその眼差しを語り手に向けないことを，星が輝きを隠す様子になぞらえる。このことから，女性の目＝眼差しが星に喩えられていると見なすことができる。「女性」と「星」の組み合わせはしばしばミンネザングに登場する。例えば，ヴァルター・フォン・デァ・フォーゲルヴァイデ Walther von der Vogelweide は，意中の女性の目の美しさや輝きを星に喩えて賞賛する。

Ir houbet ist sô wunnen rîch,
als ez mîn himel welle sîn.

---

[13] 黒崎勇: Der von Kürenberg −試訳と紹介−［甲南大学文学会『甲南大学文学会論集』第 26 号，1965 年，59-94 頁］，74-75 頁参照。
[14] Vgl. Des Minnesangs Frühling, a. a. O., S. 27.
[15] Vgl. Tervooren, a. a. O., S. 174.

[…]
Dâ liuhtent zwêne sternen abe.[16]
彼女の頭はとても美しい，
あたかも私の天であろうとするかのよう。
[…]
そこには二つの星が輝いている。
(ヴァルター L53, 25 第 2 節 1-2，4 行)

ヴァルターのリートでは，女性の身体美をつぶさに称賛することで，いかに自分が女性を愛しているのかが強調されている。

しかしキューレンベルクのリートでは，女性が男性を愛するが故に，星のような輝きを持つ目＝眼差しを隠すのである。つまり男性と相愛であるがために，女性の身体美が意図的に隠されるという逆説がここでは生じている。

上記のように本章では，キューレベンクのリートにおける女性の身体美に関連する表現を外観した。彼のリートでは，女性の身体美に関する具体的な描写はごく僅かである。その美は主に「薔薇」や「星」を用いて比喩的に表現されている。また女性の美しさに関して„schoene“という形容詞のみを用いている。

では次に，内面性を表す表現を中心に考察したい。

3. „hübesch“と„edel“

キューレンベルクは形容詞によって登場人物の描写にバリエーションをつけているが，その形容詞の用法はごくありふれたものである[17]。そのうち登場人物の内面的な美徳と関連する形容詞は，「宮廷にふさわしい，礼節をわきまえた」„hübesch“，「高貴な」„edel“，「良い」„guot“である。

„hübesch“はフランス語の„curtois“の借用語に由来する形容詞で，「宮廷叙事詩」(höfisches Epos)において重要な役割を果たす概念である[18]。しかしながら，ミンネザングでは用例に乏しい。『ミンネザングの春』に収録されているリート群では 4 例である。そのうち，キューレベルクの用例は 1 例のみである。

---

[16] ヴァルターのリートは以下の版より引用した。Bein, Thomas (Hrsg.): Walther von der Vogelweide. Leich, Lieder, Sangsprüche. 15., veränderte und um Fassungseditionen erweiterte Auflage der Ausgabe Karl Lachmanns. Berlin (De Gruyter) 2013.

[17] Vgl. Die deutsche Literatur des Mittelalters Verfasserlexikon. Bd. 5. Unveränderte Neuausgabe der 2. Auflage. Berlin (de Gruyter) 2010, Sp. 457.

[18] Vgl. Wolf, Beat: Glossar zur höfischen Literatur des deutschsprachigen Mittelalters. Bern (Peter Lang) 2002, S. 37.

Leit machet sorge,　vil liebe wünne.
eines hübschen ritters　gewan ich künde:
daz mir den benomen hânt　die merker und ir nît,
des mohte mir mîn herze　nie vrô werden sît.
悩みは，素晴らしい喜びを苦しみに変えてしまいます。
私は礼節をわきまえた騎士と知り合いました。
見張りたちと彼らの嫉妬がその騎士を私から奪ってしまいました。
だから，それ以来私の心が楽しくなることはなくなりました。
(キューレンベルク MF 7,19。下線部は筆者による。)

「見張り」(merker)とは，二人の様子を監視し，二人の恋仲を妨害しようとする人々を指しミンネザングでしばしば登場する。リート内で直接語られることはないが，一般的にミンネザングに登場する女性は既婚者であるという前提があり，この前提を踏まえるのなら，女性が夫以外の男と逢瀬を重ねていることが周囲に知られてしまえば彼らの注目を集めてしまうことは自明であろう。場合によっては，不貞により二人は何らかの責め苦を負うことにもなりかねない。

しかし，不貞行為に対する結果として女性の心から喜びが失われてしまったこと，すなわち不貞により女性が不幸になるという教訓をこのリートで訴えているのではない。不貞行為の報いとして女性の不幸な様子を描くことで，不貞行為を戒めるという道徳的側面をこのリートでは考慮していない。姦通を巡る倫理的規範がここでは問題とされていないのである。むしろリートの受容者は女性に同情し，二人の仲を妨害して，女性から喜びを奪った「見張り」に批判の目を向ける。なぜなら「見張り」が二人の恋仲を妨害したのは，姦通という倫理的問題からではなく，二人に対する「嫉妬」(nît)によるものだからである。
そして，このリートの 3 行目の従属接続詞„daz“を「結果」を導く接続詞と捉えると,周囲の人々の「嫉妬」の意味がより明確になる。すなわち，女性と恋愛関係にある騎士が„hübesch“ であるが故に周囲の人々の「嫉妬」が惹起されるのである。このリートにおける男女の関係を阻害するのは二人の関係が不貞であるからではない。男性が„hübesch“であり，女性が男性の„hübesch“な点に惹かれ，その„hübesch“な男性もまた語り手の女性を愛するが故に二人の関係は引き裂かれるのである。謂わばこのリートは男性の„hübesch“を中心に展開しているといえよう。

それでは„hübesch“について具体的に検討していきたい。„hübesch“とは，宮廷社会の構成員にふさわしい，「十分な教育を受けた，礼儀正しい」振る舞いを意味する[19]。その対義語は

[19] Vgl. BMZ, Bd. I, a. a. O., Sp. 701[a].

「粗野な」態度である。つまり宮廷社会以外の民衆＝農民の振る舞いである[20]。農民の振る舞いとは具体的にどのようなものか，ミンネザングで農民が描かれるようになるのはナイトハルト Neidhart が登場する 1200 年以降まで待たねばならない。ナイトハルトのリートでは農民たちの粗野な態度や喧騒などの農民たちのいざこざが戯画的に描写される。ナイトハルトは服装などの宮廷文化を模倣しながらも，野卑な振る舞いをする農民たちに批判の目を向ける。

zwêne dörper (daz si sîn verwâzen!),
si trougen beide röcke nâch dem hovesite,
Ôsterrîches tuoches: […]
wol geslagen
wâren in ir gürtel beide samt.
oedeclîchen wunden sî den kragen
bî dem tanze, daz ich michs erschamt[21].
二人の田舎者(dörper)は，(彼は呪われるがいい！)
宮廷風(hovesite)の上着を着ていた。
上着はオーストリア産の生地，　[…]
二人の帯には金具が打ち付けてあった。
彼らが踊る際に奇妙に首をかしげる様を，私は恥ずかしく思った。
(ナイトハルト WL Nr. 18 第 2 節 4-10 行)

ナイトハルトの描く農民像が必ずしも実際の農民を描いているという保障はないが，宮廷風の振る舞いとして何を理想としていたのかを窺い知ることができよう。宮廷風の服装やダンスなど，表面的なことだけを真似ることに対してナイトハルトは強く非難する。例えば以下のリートでは，農民の一人が宮廷風のダンスを踊っている際に，女性から強引に指輪を奪い，女性に怪我を負わせたことを強く非難する。

Alsô vlôs mîn vrouwe ir vingerîde.
dô sî den krumben reien ûf dem anger trat,
dô wart ez ir ab ir hant, seht, âne ir danc genomen!
[…]

[20] Vgl. Wolf, a. a. O., S. 37.
[21] ナイトハルトのリートは以下の版より引用した。Neidhart von Reuental: Die Lieder Neidharts. Hrsg. von Edmund Wiessner. Tübingen (Max Niemeyer) 1955.

jâ verklagte ich wol daz vingerlîn,
het er ir verlenket niht die hant.
私の恋人フリデルーンは指輪をも失った。
彼女が野原で輪舞のステップを踏んでいた時に，指輪は，そう，彼女の意に反して奪われてしまったのだ。
[…]
指輪のことだけを嘆いたかもしれまい，もしもあの男が，彼女の手をくじいたりしなかったのならば。(ナイトハルト WL Nr.18 第 4 節 1 -3 行，9-10 行)

特に「高きミンネ」に基づく婦人奉仕においては感情に任せた振る舞いではなく，分別を持って女性に接することが求められる。ナイトハルトのリートに言及されるような振る舞いは，婦人奉仕と対極に位置する。キューレンベルクのリートではまだ「高きミンネ」概念は芽生えておらず，男女の一途な想いはリートに描かれているものの，ミンネや婦人奉仕に関する内省について熟していない。とはいえ，騎士としての振る舞いや精神性は，騎士を形容する語彙によって垣間見ることは可能である。„edel“という形容詞もその一つである。„edel“は，元々は「貴族の生まれの，高貴な血筋の」という意味であり，そこから転じて「傑出した性質によって際立っている」ことを表す[22]。„edel“もまた„hübesch“と同様に「宮廷」に関連する語だといえよう。なお„edel“は『ニーベルンゲンの歌』(Das Nibelungenlied)などの「英雄叙事詩」(Heldenepik)では好んで使用されるが，対照的にミンネザングにおいて使用例はそれほど多くない[23]。『ミンネザングの春』に収録されているリート群の用例は 13 例である。キューレンベルクの„edel“の用例は 1 例のみである。リートはすでに本論で引用しているが，„edel“の用例箇所のみ再掲したい。

Swenne ich stân aleine in mînem hemede,
unde ich gedenke an dich, <u>ritter edele</u>,
ひとり肌着を着て
<u>気高い騎士</u>のあなたを想うと，
(キューレンベルク MF 8,17: 1-2 行。下線部は筆者による。)

„edel“は„edele“とも表記されることがある。このリートでは 1 行目の「肌着」(hemede)と脚韻を踏むために„edele“という語を選択した可能性も考えられる。しかし，„edele“は„hemede“の脚韻としては不完全である。『ミンネザングの春』において，„hemede“と„edele“と

[22] Vgl. BMZ, Bd. I, a. a. O., Sp. 8[b].
[23] Vgl. Wolf, a. a. O., S. 20.

いう脚韻の組み合わせはこの１例のみである。また„edele“の脚韻の組み合わせで，„hemede“以外の語彙との脚韻は『ミンネザングの春』では確認できなかった。以上の点に鑑みると，„hemede“ - „edele“という脚韻はレトリック上の常套句として形式的に用いられているのではなく，この二つの語彙の使用にキューレンベルクの強い意図性を見ることができるであろう。

語り手の女性は騎士のことを「気高い」(edel)と呼ぶ。上述したように，このリートは一人佇む女性が意中の騎士に想いを馳せる場面を描いている。„hübesh“も„edel“も，「騎士」(ritter)の付加語形容詞として使用されている。そして，両方とも女性の台詞の中で用いられていることは興味深い。女性は意中の騎士について，宮廷的な洗練された素養を身につけた，高貴な心映えを讃えているのである。

以上，形容詞 „hübesh“と„edel“について考察した。この二つの形容詞は男性=騎士に関する内面性や態度を表すための枕詞として使用されている。一方，騎士に関する身体的な特徴についての具体的な描写はキューレンベルクのリートでは確認できない。しかしリートでは，騎士の姿を「美しい」(schoene)と形容している箇所があり，キューレンベルクは外見的な美的要素も騎士の望ましい特性のひとつとみなしていたと考えられる。次に男性の身体美について言及しているリート MF 10,17 を取り上げたい。

4. 男性の身体美と宮廷的振る舞い

男性の身体美が語られる箇所は以下の通りである。語り手の男性は女性との恋愛について次のように述べる。

Wîp unde vederspil　　diu werdent lîhte zam.
swer sî ze rehte lucket,　　sô suochent sî den man.
als warb <u>ein schoene ritter</u>　　umbe <u>eine vrouwen guot</u>.
als ich dar an gedanke,　　sô stêt wol hôhe mîn muot.
女と鷹はたやすく飼い慣らせられる。
正しいやり方で誘えば，女たちは男に寄ってくる。
そのようにして，<u>一人の美しい騎士</u>が<u>素晴らしい女性</u>を求めた。
そのことを考えると，私の心は高鳴るのだ。
(キューレンベルク MF 10,17。下線部は筆者による。)

「一人の美しい騎士」(ein schoene ritter)というように，騎士の身体美がここで言及されている。しかし，リートの内容はこれまで引用してきたものと趣が大きく異なっている。語り手の男性は女性を「鷹」(vederspil)になぞらえる。„vederspil“とは，鷹などの狩猟用に飼育され

た「鳥」を意味する[24]。そして「鷹狩り用の鷹」(vederspil)という語彙からは，「女性を得ること=狩り」というイメージを想起させる。女性を手懐けることは「鷹」を飼い慣らすように簡単だと男性は述べる。さらには正しい方法を使えば女性の方から男性になびいて来ると豪語する。「高きミンネ」において，女性は容易に男性になびくことのない気高い存在として描かれるが，キューレンベルクの主張は「高きミンネ」とは対照的である。ただし，キューレンベルクは女性を「素晴らしい」(guot)と形容しており，女性のことを軽んじているわけではない。

脚韻に注目すると，３行目の„guot“は４行目の„muot“と韻を踏んでおり，この組み合わせはミンネザングでしばしば使用されている。脚韻の関係上，形式的に„guot“という形容詞を用いたという可能性も否定できない。しかしキューレンベルクのリートに登場する女性においては，本論で引用したように男性を想う一途さが強調されており，単に脚韻を合わせるためだけに„guot“を用いたのではないと思われる。そこで„muot“という語に着目したい。「高きミンネ」において，「高揚した気持ち」(hôchgemuot)になることは重要である。ただし，この気持ちは女性への求愛が成功したことによって生じるのではない。心変わりすることなく女性を愛し続けることによって生じるものである[25]。「高きミンネ」においては，女性は男性に対して冷淡であるが，男性は例えば女性からの挨拶などのごく僅かな女性の好意に満足するという，被虐的な世界が展開される。ただしここで強調されているのは，苦痛に耐えることを喜びとする倒錯的世界観ではない。女性の態度に関わらず，女性に対して変わらずに愛を捧げるという「不変」や「誠実さ」が「高きミンネ」では重要視される。男性は女性に愛を捧げ続けるが，女性は冷淡なままである。しかし時として女性が男性に挨拶をするなど，男性を気にかけることがある。その僅かなことを「報い」(lôn)として男の心は高揚するのである[26]。謂わば，女性の態度如何に拘らず女性に愛を捧げるという男性の精神修養の側面が「高きミンネ」では強調される。

しかしキューレンベルクのリートでは，「高きミンネ」に見られるような精神修養や，愛を巡る複雑な感情は見られない。男性の心が高鳴るのは，「素晴らしい」女性を手に入れることができるのだという期待に胸を膨らませるからである。キューレンベルのリートでは„warb<werben“と述べられており，中高ドイツ語の„werben“は「~を得ようと努める，目的を達成するためにあらゆる手を尽くす」という意味なので[27]，話題に上がっている「美しい騎

---

[24] Vgl. BMZ, Bd. II. / 2, a. a. O., Sp. 503[a]. 及び Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch. Bd. III. Stuttgart. (Hirzel) 1878, Sp. 39.

[25] ヴェルナー・ホフマン他，前傾書，269 頁。

[26] 例えばラインマル Reinmar は次のように述べている。「彼女に仕えていることが私はうれしい，/ 彼女はほんのわずかな事で私に十分に報いてくれる」(Ich fröiwe mich des, daz ich ir dienen sol, / si gelônet mir mit lîhten dingen wol　ラインマル MF 159, 1: 第 5 節 5-6 行)

[27] BMZ, Bd. III, a. a. O., Sp. 722[a].

士」が実際に女性を得ることができたのかは明らかにされていない。しかし，１行目の「女は鷹のように飼い慣らすことができる」，２行目の「正しい方法を使えば，女の方から男に寄ってくる」という表現から，結果は自ずと明らかであろう。男性は「素晴らしい」女性を手に入れることができるのだ。男性を一途に想うような「素晴らしい」(guot)女性と，あたかも「狩り」のように女性を得ようとする男性の野心的な「気持ち」(muot)，この二つの対照性が„guot“ - „muot“という脚韻によって強調されている。そして„schoene“には,「純粋な」,「立派な」という意味もあり[28]，それを踏まえれば「美しさ」は内面的な美徳をも反映していると見なすことも可能である。しかしキューレンベルクのこのリートでは，「狩り」という比喩などの男性の言動によって，男性の「美しさ」あるいは「立派な振る舞い」は女性を得るための手段として軽薄的に響くのである。

女性は男性の宮廷風の振る舞いを称賛するが，男性において「宮廷風」は必ずしも精神向上という人格陶冶を意図していない。しかし，宮廷風の節度ある態度で男性を一途に思う女性だけがキューレンベルクのリートに登場するのではない。女性が男性に対して積極的に求愛の態度を示すパターンも存在する。ある夜，女性が一人城内に佇んでいると，「キューレンベルクの調べ」(Kürenberges wîse)で美しく歌うのを耳にする[29]。女性はその調べを歌う男性に対して，「私の恋人になるのなら私の領地に留まっても良いが，そうでないなら領地から立ち去るように」と述べる。

er muoz mir diu lant rûmen,　alder ich geniete mich sîn.
彼は私の領地から立ち去らなければなりません。もしくは彼は私のものになってもらいます。(キューレンベルク MF 8, 1 第４行)

「私の領地」と述べていることからこの女性は身分の高いことが窺える。この女性の己の立場を利用した強引とも言える求愛に対して，男は以下のような言葉を残して女性の元から立ち去る。

Nu brinc mir her vil balde　mîn ros, mîn îsengewant,
wan ich muoz einer vrouwen　rûmen diu lant,
diu wil mich des betwingen,　daz ich ir holt sî.
si muoz der mîner minne　iemer darbende sîn.
さあ，今すぐ私の馬と鎧をここへ持ってきてくれ。

---

[28] BMZ では，２番目の項目に„rein, sauber, unverletzt“, 4 番目の項目に„schön, herrlich“という意味を挙げている。Vgl. BMZ, Bd. II/2, a. a. O., Sp. 191[a]-191[b].
[29] キューレンベルク MF 8, 1 第２行目参照。

ある女性のせいで私はこの地を去らねばならない。
あの女性は，私が彼女に好意を抱くことを無理強いする。
彼女はこれからもずっと私の愛を失ったままでいなければならない。
(キューレンベルク MF 9, 29 1-4 行)

女性の求愛に応じるか否かの選択に対して，男は迷わず女性からの愛を拒絶し，女性の国から立ち去る準備を始める。あなたのような女性を愛することはないと述べる男の言葉は辛辣である。自分より立場の強い女性をコケにする一種の痛快さがこのリートには漂っている。

しかし立場を利用して男性の愛を得ようとする女性と，己の歌によって女性を惹きつけた男性とを比べると，求愛における作法に適っているのは男性の方である。ここにキューレンベルクの歌人としての自負を見ることもできる。そして一見乱暴とも言える男の台詞の中に，恋愛作法に対する教訓が潜んでいる。キューレンベルクのリートには，「高きミンネ」の萌芽とも言える精神性の高さと，粗野で直情という二つの両極端な側面が混淆している。この二面性は身体美と内面的美徳の不一致にも表れているといえよう。

まとめ

キューレンベルクのリートにおいては，「騎士」(ritter)，「肌着」(hemede)などの具体的事物が登場し，その点においては「高きミンネ」概念が発生する以降のミンネザングに比べて写実的な要素が強い[30]。しかし，彼のリートでは身体に関する描写はごく僅かであり，男女の身体美は主に「美しい」(schoene)という形容詞に集約される。とはいえ，キューレンベルク以降のミンネザングにおいても男女の身体に関する具体的な描写は基本的に乏しい。男女の愛を巡る内省などの感情的な機微を描くことに主眼が置かれるのがミンネザングの特色の一つである。ミンネザングで女性の身体美がより具体的に描写されるようになるのは，ハインリヒ・フォン・モールンゲンやヴァルター・フォン・デァ・フォーゲルヴァイデらが活動する 1190 年代以降である。ただし彼らのリートにおける身体美の詳述は，いかに女性の身体美を詳述するかという，伝統的なミンネザングとは異なる表現の追求であり，謂わば歌人としての修辞技法に対する挑戦という要素が強い。

キューレンベルクのリートでは，男女双方の姿は「美しい」と述べられている。ヴァルターらのリートと比較すると，キューレンベルクは「美しい」という形容詞を単なる常套句として使用しているように映る。ただしリートの世界の女性は，男性について„hübesch“もしくは„edel“と述べ，特に宮廷的な振る舞いや心映えを話題にしている。女性に関しては„guot“と形容される箇所があるものの，何が„guot“なのか具体的に述べられてない。また女

[30] Die deutsche Literatur des Mittelalters Verfasserlexikon. Bd. 5, a. a. O., Sp. 457.

性の方から男性に積極的に求愛するという面も見られる。

男性は，女性に対する誠実さや一途な想いを吐露する一方，宮廷的な振る舞いや外見の美しさを，女性を得るための手段として用いるという側面も見せる。男性に関しては外見の美しさと内面的な美徳が必ずしも合致していない。

精神性の高さと直情的な言動の混淆は，典型的なミンネザングにはないキューレンベルクのリートの魅力の一つである。この 2 つの混淆は男女双方に見られる。そして身体描写との関連においては，特に男性の身体美と内面的美徳の不一致という形でこの混淆が表れていることを本論では確認した。

参考文献

Hall, Clifton: Head-Word and Rhyme-Word Concordances to Des Minnesangs Frühling. A Complate Reference Work. Technical Support by Samuel Coleman. Colorado. (University Press of Colorado) 1997.

Kasten, Ingrid (Edition der Texte und Komm.) / Kuhn, Margherita (Übers.): Deutsche Lyrik des frühen und hohen Mittelalters. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker) 1995.

Köhn, Anna: Das weibliche Schönheitsideal in der ritterlichen Dichtung. Leipzig (Hermann Eichblatt Verlag) 1930.

Kraus, von C. : Des Minnesangs Frühling. Kommentare. III /1. Untersuchungen von C. von Kraus. Durch Register erschlossen und um einen Literaturschlüssel ergänzt. Herausgegeben von H. Tervooren und H. Moser (Hirzel) 1981.

Krüger Rüdiger: Puella bella. Die Beschreibung der schönen Frau in der Minnelyrik des 12. und 13. Jahrhunderts. Stuttgart (Helfant Edition) 1986.

Schweikle, Günther: Mittelhochdeutsche Minnelyrik. I. Frühe Minnelyrik. Stuttgart (Metzler) 1993.

Tervooren, Helmut: Schönheitsbeschreibung und Gattungsethik in der mittelhochdeutschen Lyrik. In: Schöne Frauen - Schöne Männer. Literarische Schönheitsbeschreibungen. 2. Kolloquium der Forschungsstelle für europäische Literatur des Mittelalters. Hrsg. von Theo Stemmler. Tübingen (Gunter Narr Verlag) 1988.

ヴェルナー・ホフマン他訳著：ミンネザング　ドイツ中世恋愛抒情詩選集 (大学書林) 2001 年。

尾野照治: ドイツ中世の女性教育と理想的女性像［京都大学『ドイツ文學研究』第 41 号，1996 年，1-39 頁］。

クリスタ・グレシンジャー (元木幸一，青野純子訳): 女を描く　ヨーロッパ中世末期からルネサンスの美術に見る女のイメージ (三元社) 2004 年。

黒崎勇: Der von Kürenberg −試訳と紹介−［甲南大学文学会『甲南大学文学会論集』第 26 号，1965 年，59-94 頁］。

高津春久編訳: ミンネザング(郁文堂) 1978 年。
新保淳: 「身体」を考察することの現代的意義: 中世ヨーロッパにおける心身関係の視点から［静岡大学教育学部『静岡大学教育学部研究報告　人文・社会科学篇』第 46 号，1996 年，79-90 頁］。
中世ドイツ文学研究会: 初期のミンネザング［東京大学 詩・言語同人会編『詩・言語』第 1 号，1966 年，35-45 頁］。
フェデリコ・ルイジーニ (岡田温司/水野千衣編訳): 女性の美と徳について　ルネサンスの女性論 3 (あすな書房) 2000 年。
ヨアヒム・ブムケ (平尾浩三他訳): 中世の騎士文化(白水社) 1995 年。

本研究は JSPS 科研費 JP19K00487(基盤研究(C))「ドイツ文化における中世的身体観の形成と受容―内と外の乖離に生じる逆説について」(研究代表者: 伊藤亮平)の助成を受けており、その共同研究の成果の一部である。

Die Schönheit des Körpers und die innere Tugend in den Liedern des Kürenbergs

Ryohei ITO

In diesem Aufsatz geht es um den Zusammenhang zwischen der Schönheit des Körpers und der inneren Tugend im Minnesang. Ziel ist es, diesen Zusammenhang besonders anhand der Beobachtung der Adjektive „schoene“, „guot“ „edel“ und „hübesh“ in den Liedern des Kürenbergs zu erklären.

In seinen Liedern tauchen oft konkrete Dinge wie „ritter“ oder „hemede“ auf, und in dieser Hinsicht klingen seine Lieder realistischer als anderer Minnesang, dessen Hauptthema „hohen minne“ ist. Jedoch gibt es in seinen Liedern sehr wenige Beschreibungen des Körpers, und die körperliche Schönheit von Männern und Frauen wird hauptsächlich mit dem Adjektiv „schoene“ zusammengefasst. Aber auch im Minnesang nach der Periode von Kürenberg gibt es im Grunde wenige konkrete Beschreibungen der Körper von Männern und Frauen. Erst in den 1190er Jahren, als Heinrich von Morungen oder Walther von der Vogelweide tätig waren, wurde die körperliche Schönheit der Frau im Minnesang konkreter dargestellt. Die detaillierten Beschreibungen der körperlichen Schönheit sind für sie das Streben nach Darstellungen, die sich vom traditionellen Minnesang unterscheiden.

In den Liedern des Kürenbergs wird festgestellt, dass sowohl Männer als auch Frauen „schoene“ sind. Im Vergleich zu den Liedern von Walther scheint Kürenberg das Adjektiv „schoene“ als bloßes Klischee zu verwenden. Dabei bezeichnen die Frauen in der Liederwelt Männer aber als „hübesh“ oder „edel“, wodurch der Zusammenhang der körperlichen Schönheit mit dem höfischen Verhalten besonders betont wird.

Während Männer in den Liedern des Kürenbergs ihre Aufrichtigkeit und ihre unerschütterlichen Gefühle gegenüber Frauen ausdrücken, zeigen sie auch den Aspekt, höfisches Verhalten und Schönheit des Aussehens als Mittel zu verwenden, um Frauen zu gewinnen. Bei Männern stimmen die äußere Schönheit und die inneren Tugenden nicht immer überein.

Die Mischung der hohen Spiritualität und der groben Worte und Taten ist einer der Reize der Lieder des Kürenbergs, die im typischen Minnesang kaum zu finden ist. Diese Mischung von beiden Aspekten findet sich in seinen Liedern sowohl bei Männern als auch bei Frauen. Und im Bezug auf die körperliche Darstellung bestätigt dieser Aufsatz, dass diese Mischung besonders deutlich im Widerspruch zwischen der körperlichen Schönheit und den inneren Tugenden bei Männern auftritt.